十字路

インフレは２％で止まらない

インフレは感染する。日本はデフレで悩んでいるからインフレは無縁ということはない。輸入品価格の上昇は国内でインフレ感染をもたらす。

日本でインフレが広がりにくいのは、まず円高という有効な水際対策が存在したからだ。輸入品価格が上がっても、円建てで見た価格上昇は抑えられる。

さらに、川上の原材料価格が上がっても、国内の感染拡大が抑えられた。海外ではコストの上昇は販売価格に転嫁されるのでインフレが広がるが、所得が伸びない日本では、販売価格への転嫁を抑える企業行動が一般的であった。

しかし、環境が変われば、日本でも物価は上がる。まず、円が高値を更新する時代は終わった。巨額の貿易黒字を続けるほどの輸出競争力を持っていたのは過去の話だ。

水際対策の力が落ちたところに、原材料価格の上昇が重なれば、感染力は高まる。利益を削って、人件費を抑えてでも販売価格への転嫁を抑えようという企業努力はいずれ限界を迎える。

リーマン・ショックの陰に隠れて忘れられがちだが、原油価格が1バレル＝100ドルを超えて上昇していた2008年中ごろは、消費者物価も2％を超えて上昇していた。

今の状況はより深刻かもしれない。二酸化炭素（CO_2）排出量削減といった環境問題への取り組みや経済安全保障への対応はコストがかかることであり、インフレ要因は一時的とは言えないだろう。

異次元の金融緩和でも上がらなかった物価も、環境が変われば上がりだす。企業が欧米流の価格転嫁に少しカジを切るだけで、物価上昇圧力はかなり高まりそうだ。コストプッシュで上がりだした物価を金融引き締めで抑えることは難しい。ひとたび上がりだした物価が、2％で止まると考えるのは根拠なき楽観だ。

（三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング
研究主幹　鈴木　明彦）

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。